マイケル ウォルフ、ジャ ナリスト アメリカ

:

明:

2003年度のウィルバ 宗教 籍部 で最 秀 を受 した著者であり 人でもある、そしてテッド コペルの“イトライン”に出演し、ハッジの 修も めたマイケル ウォルフがイスラ ムを受け入れた彼の を述べる。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 著名人

より: マイケル ウォルフ

日06 Dec 2009

集日 21 Oct 2010

アメリカでの25年 の作家生活の 、私は自分の皮肉的なところを和らげる何かを欲していました。私は、悟るということの新しい方法を探していました。その方法の一つは、この分野でのある の必要を打ち立てることです。多元主 の から、私は自然と、人 差

と自由の　に重きを置くようになっていました。私は20代初期に、3年 アフリカで生活をしたことがありました。私にとっての形成期であったこの 、私は 々な部族の 人、アラブ人、ベルベル人、そしてムスリムであるヨ ロッパ人らと交友しました。これらの人々は、西洋の社会的人 の分 にこだわりなどありませんでした。また私たちの出会いの中で、肌の色の いなどは 多に　にはなりませんでした。私はまず 迎され、そして私の真によって　されました。これとは 照的にヨ ロッパ人やアメリカ人は、、人 差 的概念をもっていない多くの者でさえも、自 的に人を人 的に分 しています。一方ムスリムは、その信仰と行 により分 されます。私はこれを、超越した 新なものだと思いました。マルコムＸは、彼の民族の救いをそこに たのです。彼はこう きました：“アメリカはイスラ ムを理解する必要があります。なぜならこれは社会の人　　を消し去る唯一の宗教だからです。”

私は、物 主 的文化からの逃げ道も探していました。私は、 的な次元に辿り着きたかったのですが、自分が少年の に知っていた 来の道は ざされていました。私の父はユダヤ人で、母はキリスト教徒でした。このような生い立ちから、私は2つの宗教のもとに育ちました。 かにいずれの信仰とも奥深いものでした。しかし一方は 民思想を　しており、私はその正当性を疑いました。そしてもう一方は秘 に基づいたもので、私はそれを不快に感じていました。1世 前、私の母方の曾曾祖母の名前はオハイオ州はハミルトンの大通りにあるキリスト教会のステンドグラスに据えられましたが、二十 の の私にとって、これは何の意味もなしませんでした。

これらが私の初期の人生が提供してくれたものです。今このことを考えれば考えるほど、私はアフリカのイスラ ム での　に ってしまいます。1981年と1985年の二度のモロッコへの旅の 、私はアフリカ大 に 和のとれた生活を つけました。それは私が追っていた大 でも、また　でもありませんでした。私は、自分が生きている今の生活に　できる 的概念の型、　みを探していたのです。私は自分の文化を“交 ”したくはありませんでした。私は、新しい人生の意 に辿り着きたかったのです。英米式の夕食の 、私はトイレに手を洗いに行きました。私の退席中、ハシディム派の 体がドアの外で んで祈っていました。私が えた には、彼らは私に 付かないほど祈りに没 していました。トイレから出

ると、かろうじて取っ手を かせるくらいでした。
通路 に出ることなどはもっての他だったのです。私は集まった人の背中を ながら、廊下に を突き出した体 でしか立つことが出来ませんでした。彼らは手のひらサイズのお祈りの本を持ち、まるで占いでもしているかのように胸骨の上の 句を叩きながら、印象的な形で踊っていました。少しずつ きはふらつきだし、ロックンロ ルの 妙な きのようでした。私は、彼らが わるまでトイレのドアから ていて、それからそっと通路から自分の席へと りました。

私たちはその夜 くにブリュッセルに到着し、食事のトレ の上に てられたイディッシュの新 を つけました。 行 がモロッコへ向けて した 、彼らはもういませんでした。私はここで、自分の人生のこの期 に、どんな壮大な意向に したかということを意味しているのではありません。1981年のはじめ、私は旅への 味と欲求に り立てられました。お金があった の私のお に入りの旅先はモロッコでした。旅ができない には、本がありました。この魅力が 国情 へと り立てられた何人かの作家、フレ ヤ スタ クによる次のような文章の ける 家たちとの出会いをもたらしました:

“アラビアの永 の魅力は、旅行者がそこで彼自身を なる人として いだすことだ。またより明瞭な美 のように感 的または衒学的な人々の率直さ。そしてもしかすると人は、人サイイド アブドゥッラ の言う旅の5つの理由:
“ を置き去る、生 を立てる、学 する、良いマナ を 践する、そして立派な人物と出会う、”の上に、更に人に好まれる心地よさを付け加えるかもしれない。”私は、必要なもののリストを作ることは出来ませんでしたが、自分が追求しているものに してのかなりの概念はありました。形而上学が科学的であるように、私が欲していた宗教は形而上的なものでした。それは狭い合理主 により制限されるものでも、その司祭を喜ばせるための秘 のやり取りでもないのです。そこには司祭はおらず、自然と神 な物の分もありません。もし私がそれに役立てるのなら、そこには肉体的な 争もありません。性は自然で、 の いの上にあるものでもありません。私は最 的に、感 を研ぎ、精神をしつける 日の である 式的要素を欲していたのです。とりわけ、私は透明さと自由を求めていました。私は に、教 にくくりつけられるために道理を手放したくはありませんでした。そしてイスラ ムについて学べば学ぶほど、それは私の追い求めていたものと一

致するかのように映り始めました。この 、私の知っていた大抵の教育レベルの高い西洋人は、いかなる い宗教も疑う 向にありました。彼らは宗教を、政治的手法として分するか、彼らヨ ロッパ人の 去からの考えを映し出す中世の概念だとして追いやっていたのです。彼らの意 の根源を探し出すことは しくはありませんでした。何千年もの西洋の 史は、多くの 知と虐 の道へと いたことを 悔させる、多くの十分な理由を残しました。私たちの世 の 、子供の十字 や 端 からナチズム、共 主 の 形した信仰まで、全ての国々は信仰により疲 させられてきました。ニ チェの、近代国家が代替宗教となるという恐怖は、悲 的にも正 に 明されてしまったのです。私には、我々の世 は信仰者が不可知者とほぼ同 の形で存在した、 信仰の一 代として わったように思えるのです。教会の所属に なく、世俗的ヒュ マニズムは、西洋人の呼吸する空 であり、私たちが つめるレンズでした。他の世界の 点と同 に、この 点は普及性があり、かつ明瞭でした。民主主 と全てのその 数かつ魅力的な形の自由への追及は、私たちの にわたる同一化の基 を形成するのです。我々の共有された先入 に没 することで、人は同じ地球上に他の生き方が存在することすら に忘れてしまうこともあるのです。私が旅をしている 、例えば650,000,000人のムスリムが44カ国において多数派で、イスラ ムの正 な教えに忠 でした。また、ヨ ロッパ、アジア、アメリカでは 400万人が少数派ムスリムとして住んでいました。植民地独立 の により、イスラ ムは30年ほどで、西ヨ ロッパの主要な信仰になっています。世界の主要な宗教の内、イスラ ムだけがその数を やしているのです。政治的 心のある友人たちは、私の新しい 味に困惑しました。彼らは皆、そして例外なく、中 の似たり寄ったりの暴君の とイスラ ムを混同していました。彼らが む本、彼らが る新しい放送は、政治的な 能のセットとして信仰を描写しました。そしてその大半は精神的 践について何も っていませんでした。私は彼らに、マエ ウエストの次の言 を引用するのが好きです:

"あなたが宗教を笑いの にする はいつでも、あなたが笑われているのです 史的にムスリムは、イスラ ムを最 であり、アダムへたどる原初の宗教の成熟した表 であると ています。ユダヤ教同 、断固として一神教であり、イスラ ムの主要な 言者 は、 の の として崇められ、イエスとムハンマド（彼らに神の称 あれ）を とする一神教です。本

‘ほんし的に更新されたメッセ ジとしてイスラ ムは、忘れ失われた人生の甘さの味を数百万人もの人々に思い起こさせる役割を世界で果たしたのです。ゲ テはクルア ンに

して、このような言 を残しました:
" るが良い。この教えは失 しないであろう。我々の全システムをもってしても、私たち
はそこに到 することはできないのだ。一般的に言っても、 もこれ以上行くことは出来
ない。 的なイスラ ムは、5本の柱の 践を通して表 されます。信仰告白、礼 、喜 、そして
断食は、人の人生を通して り返し 行されます。また
条件が せば、マッカへの巡礼を一生に一度行うことが せられています。この5番目の 式
をアラビア の用 でハッジと言います。学者たちはこのハッジという言 を、アラビア の
「カスド（目指すこと）」というコンセプトに、‘そして男性と女性が地上における
旅行者だとする概念に づけています。欧米の宗教では、巡礼は の名残の わりなものでで
あり、民俗的概念は一般的に なる象 にまで成り果ててしまいした。一方ムスリムの で
は、ハッジは 年数百万人の新たな巡礼者の重要な を体 しています。彼らの 代生活にお
ける 足にも わらず、服 行 、信仰告白、そして精神的社会の目に える表 は残っているの
です。大多数のムスリムにとってハッジは一生に一度の旅であり、究 の目 なのです。
改宗者として、私はマッカに行く を感じました。
旅行依存症者として私は、それ以上魅力的な目的を想像することができませんでした
。 年、一ヶ月 のラマダンの断食が、ハッジより 100日前に行われます。これらの2つの
式は、イスラ ム社会の中で意 の 化期 を形成しています。私はこの期 を利用したかった
のです。私はイスラ ムについて み、カリフォルニア州の自宅近くのモスクに出席し、
践し始めました。今や私は、存在のあらゆる 面に吹き まれる宗教であるイスラ ムに密
着しつつ学んできたものを、より深めることを期待していました。私はモロッコから
旅行を始める 画を立てました。なぜならその国は 染み深く、また 的イスラ ムに っていて
てかなり安定していたからです。一方最も旅を始めたくなかった 所は、 々しく偏狭な
人たちの 山いる淀んだ 所でした。私は く、 やかな水の主流を漕ぐことを望んでいたの
です。

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。